
魔道士と整理係

豆吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道士と整理係

【Nコード】

N1043BA

【作者名】

豆吉

【あらすじ】

上司からのセクハラに嫌気がさして勤めていた会社を辞めた桜木七生（31歳）。

ハローワークの前でアレン・クロスビーさんという外国人男性に声をかけられ、彼のアシスタントとして働くことに。その1年後、アレンさんから給料3割増で、彼の甥・デルレイの家の書庫&倉庫の整理係として働いてほしいと頼まれる。びっくりなのは、アレンさんとデルレイは実は異世界の人間で、デルレイの家は異世界のブレドン王国にあるってこと！

「この年齢でファンタジー経験をするなんて。人生って驚きの連続だよ。」と言う彼女の異世界での日常と恋愛話。

プロローグ…それは1年前でした

私は桜木 さくらぎ 七生 ななお。31歳で独身、一人暮らし。恋愛は何度かしたけど今は彼氏なし。……結婚も予定なし。製薬会社で管理部門の事務職として早11年。給料も待遇も悪くない。人間関係も円滑……だったんだけど。上司の度重なるセクハラおよびセクハラ発言に嫌気がさして会社を辞めました。

ま、辞めるときに上司のセクハラの証拠をばっちり労働局と人事につきつけて上司が免職処分を受けたと同期から聞いてすっきりできたからいいけどさ。

仕事を辞めたので、実家に帰るというのも、一瞬考えたけど……よくよく考えたら今うちの実家は同居している弟夫婦に子供が生まれて孫フィーバー真っ最中。おかげで母親の「まだ結婚しないの」攻撃をまぬがれているというのに無職になった姉が転がり込むのって非常によろしくない。

私は実家に帰るという考えを捨てて、ハローワークに向かうことにした。派遣会社に登録しておくのもいいかもしれない。ネットの求人サイトにも登録だな。

ハローワークの中に入ろうとしたところ「ちょっと、すみません」と後ろから声をかけられた。振り向くと、シルバークレイの髪の毛に緑色の瞳で彫りが深くどうみても外国人の男性だった。

周りをきょろきょろしてみるけど、私以外に人がいない。私は自分を指差して「私?」と示すと、その男性は何度もうなずいていた。「あなた、職を探していますね?」男の人はいきなりなめらかな日本語で私に言った。

「はあ……まあ、探してますけど」なんじゃ、この外人は。

「じゃあ、私のアシスタントとして働いてみませんか?」

「はあ?」

「失礼しました。私、アレン・クロスビーと言って、職業は……まあ、貿易業です。『クロスビー商会』という会社を経営しています。」

「はあ。」どうして、貿易業というまえに一瞬考えたんだろう。

「あなたのお名前を覚えていただけますか？」

「あ、失礼しました。私は桜木七生です。」思わず正直に名乗ってしまった。

「サクラギさん。ここで立ち話もなんですから、もし時間があつたら私のオフィスで話の続きをしませんか？ 待遇なども、詳しく話せます。この近くですから。」

“クロスビー商会”のオフィスというのは、クロスビーさんの住宅だった。たくさんの樹木が生い茂る大きな洋館で、クロスビーの表札のしたにクロスビー商会という表札もついている。

「奥さんを亡くしまして、家政婦さんを頼んでいますが、乱雑ですみません」と言うが、とても整然としている。

クロスビーさんが入れてくれた紅茶を飲みながら（これがまた美味しい）、私はクロスビーさんの話を聞いた。

「仕事内容というのは、私の仕事のアシスタントです。メールや電話のやりとりと、品物の管理です。それから、ちよつと言語を覚えてもらいます。OK？」

「言語、ですか？」

「はい。ブリードン語と言って、うちの貿易に必要な言語です。他では役にたちませんが、私の仕事には大変役立ちます。待遇なのですが、会社で各種保険と年金には加入します。勤務時間は朝9時からと決まっていますが、仕事によって終わる時間はまちまちです。お休みは週休2日ですが、事前に言っただければ何曜日に休んでいただいてもいいです。病気とかの場合は私に電話してくれればいいです。」

言語を覚えなくちゃいけないのは大変だし、勤務時間が不定期だ

けど待遇は悪くない。

「あと・・・言語を覚えた後、ちよつとした出張に行ってもらえないです。大丈夫ですか？」

「どこにですか？」

「えーっと、カイガイ？ですネ」

おお、海外出張か。事務職の頃には縁がなかった。なんか楽しそう。
「あ。そうそう給料なんですけど各種手当てを差し引いて・・・こんな感じです」と言ってクロスビーさんが提示した金額は、なんと前の会社の給料より2割増し！！私は思わず目を見張った。

「給料は“クロスビー商会”名義で振込みになります。なにか質問はありますか？」

「他の社員の方というのはいらっしゃいますか？」

「いいえ。私一人ですね。お金関係は全部お願いしてますから。書類を提出するだけなので楽です。」クロスビーさんは、その人のことを全面的に信頼してるらしい。

クロスビーさん本人も最初は胡散臭かったけど、話を聞いてるとマトモな人そうだし、何より新しい言語を覚えられたり（他では使えないらしいけど）、海外出張があるかもっていうのもいい・・・そして何より、あの手取りの金額。判で押したような前の仕事内容とは違いなんだか楽しそうだ。

私は、クロスビーさんの申し出を受けることにした。

クロスビーさんはうれしそうに「ありがとうありがとう」と何度もお礼を私に言った。

そんな、お礼を言われるようなこと、私しただろうか？

とりあえず、あっさり次の就職先が見つかったのはよかったかもしれない。

ブログ：それは1年前でした（後書き）

読了ありがとうございます。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

新作をUPしました。

現代物はお休みして、ファンタジー（と言えるのか）を書くことにしました。

アラサー七生の異世界生活を楽しんでいただけると幸いです。

1. 失礼なオトコ（前書き）

プロローグから1年後になります。

『内の会話はブリードン語

』内の会話は日本語です。

1. 失礼なオトコ

クロスビー商会に入社して、1年が過ぎた。クロスビーさんと仕事をするのは、とても楽しい。

電話やメールは時々しか来ないのでそっちの仕事はあんまりなくて、メインはクロスビーさんの家にある珍しい品物の管理だ。ブリーダー語も、クロスビーさんから抜き打ちテストをされたりして日常会話と読み書きに困らなくなった。

仕事の特にないときもあって、そういうときはクロスビーさんが庭にテーブルを出してお茶をするので、ご相伴に預かる。クロスビーさんの庭は亡き奥様が丹精こめて手入れをしていたらしいけど最近では忙しくて手入れができないらしい。

私も暇なときには草むしりをしたり手入れをすることにしてるけど、この庭がよみがえったら、さぞかしきれいだろうな。

「桜木さん、私のことはアレンと呼んでくださいね。私もナナオと呼びますから」

「上司を名前で呼ぶんですか？できませんよ。」

「貿易相手にクロスビーという名字が多いんですよ。区別できないでしょう？」

「なるほど。わかりました。」

そういう理由があるなら、と私はクロスビーさんをアレンさんと呼ぶことにした。

それから数日後、私はいつもの時間にクロスビー商会用に使っている部屋のドアを開けた。

「おはようございます。アレンさん。」と言ってドアを開けたところ、アレンさんの他に若い男性が立っている。

アレンさんの20年前ってこうだったんだろな・・・息子か？髪の色は同じだけど、瞳の色はコバルトブルー。

私がその人をじっと見ているように、その人も私をじっと見ている。

「アレンさん、・・・こちらは、どなたですか？」

「おはよう、ナナオ。これは私の甥で、デルレイ・クロスビーとい
います。」

『叔父上、俺にも分かる言葉で話してもらえないだろうか・・・美人だっ
て言うから期待してたのに』

『デルレイ、お前失礼だぞ。ナナオは仕事もできるし美人だ。』

『そうですか？仕事はできるかも知れませんが、叔父上と私とは
美意識が違うようだ』

デルレイさんは私が分からないと思ってしゃべっているようだけ
ど、こっちはばっちり分かるんだ。悪かったな、美人じゃなくて。
アレンさん、こんな普通の顔を美人と言ってくれてありがとう。

『すみませんね。美人じゃなくて。アレンさんがフォローしてくれ
てなかったら、あなたのすねには今頃、私の5センチヒールキック
が炸裂しているところですよ』

私がつこり笑って二人の会話に割り込むと、デルレイさんは『
な?? おまえ、言葉が分かるのか??』と驚いた。

『オマエじゃなくて、ナナオ・サクラギという名前がありますの。
言葉はアレンさんに教わりましたから日常会話に不自由しない程度
にしゃべれるようになりましたし、読み書きもできます。わからな
い言葉でしゃべられるのがイヤなら、あなたもこちらの言葉を覚え
たらいいわ』

『う・・・生意気なやつ。どうみても俺より年下のくせに』

『あなた、年齢はいくつですか』

『32だ』

『あら、同じ年齢ですわね。』とニツコリ笑うと、失礼なオトコ・
デルレイは『げ』と言ったきり絶句してしまった。

その頃、私たちの会話を聞いていたアレンさんが、とんでもない

ことを考えていたなんて、そのときは全然気がついていなかった。

1. 失礼なオトコ（後書き）

読了ありがとうございました。

誤字脱字、言葉使いの間違いなどがありましたら、お知らせください。

ちょっと感想でも書きちゃおうかなと思ったら、ぜひ書いていただけるとうれしいです！！

いきなり失礼なオトコですが・・・これがヒーローなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1043ba/>

魔道士と整理係

2012年1月4日10時45分発行